



謎の京都児童愛護院

最終回になってからですが、意外な事実が出てきました。

大正十五年十二月十二日に発行された『基督教年鑑』（昭和二年版）の「全国基督教社会事業一覧」の中に「京都児童愛護院 京都市上京区田中下柳町五 辻原光治」とあるのが見つかりました。辻原が丹波育児院以外に京都市内でも同様の児童愛護施設を運営していたというのです。

もしかするとこの京都の「辻原光治」は同姓同名の別人ではないかと疑ってみるのですが、京都府下に同じキリスト教徒で社会事業に取り組み同姓同名の人物がいたとは考えられません。やはりこれは「我々の」辻原光治に違いないでしょう。

しかし、その京都児童愛護院については、今のところ他には何の情報も見つかりません。どんな事業内容で、いつからいつまで存続したのかも分かりません。

年鑑が発行された大正十五年は、丹波育児院が閉院になったとされる年です。年鑑の同じページには「丹波育児院 丹波の国船井郡三ノ宮村水呑 辻原光治」も掲載されていますから、両施設が並行して存在していた時期があったことになり

ます。いったい京都児童愛護院とは何だったのでしょうか。辻原は事業の拡大をめざして京都へ進出していたのでしょうか、丹波を撤退して京都へ移る計画などがあったのでしょうかー謎が深まります。

転出後の消息は不明

丹波育児院の閉院に関しては、『郷土誌三ノ宮』が「個人経営であり、多額の費用を要したが、当時は国や行政機関の補助もなく、又寄付金も少なかったため経営困難に陥り、全財産を投じたが及ばず(略)、閉院するの止むなきに至った。経営者は愛知県下へ転出した」としていますが、それ以外には情報がありません。しかし、同時期に京都市内で別の施設を運営していたとなれば、もう少し違う経緯があったのかもしれない。

来年は生誕百五十年

来年(二〇二四)は辻原の生誕百五十年になります。百五十年前の農村にはまだ「江戸時代」が濃厚に残っていたはずですが、同時に急速な近代化がもたらされよ

うとしており、青年たちには当然新しい価値観が求められていました。そんな中で辻原はキリスト教に出会い、十六歳で入信して大きな影響を受けます。石井十次の岡山孤児院に触発されて三三歳で孤児院を開設し、私財を投じて二十年間経営を維持しました。しかし、五二歳にして丹波を離れ、その後どこへ向かい、どんな晩年を過ごして生涯を終えたのか、残念ながら辿れていません。最期が不明ですが、筆者の力量では、ここまで打ち切らせていただくほ

かありません。

なお、バックナンバーはクロバー・サービスのホームページ「クロバー」の中にあります。

(山下幾雄)

辻原光治略年譜

明治	7年8(1874)	0歳	3月6日、誕生 (父辻原清之丞・母げん、6歳上に兄佐太郎がいた)
	19年(1886)	12歳	小学校卒業(校名不詳) (この頃、大朴村友金八郎兵衛へ養子に入ったか?)
	20年(1887)	13歳	2月より檜山村中尾喜太郎に「普通学」を学ぶ
	22年(1889)	15歳	6月13日、檜山村役場書記に任用される この頃近藤亮太郎らのキリスト教伝道に触れる
	23年(1890)	16歳	3月9日、須知会堂にて留岡幸助牧師から受洗(グンゼ創始者波多野鶴吉らと同時)／3月、兄佐太郎、前橋教会より丹波教会転入／5月、中尾喜太郎の下での勉学終える／6月、蚕糸業技術習得のため下和知村新生社に入社／12月25日、兄佐太郎、芦田こと子と結婚式
	26年(1893)	19歳	12月、新生社を退社
	28年(1895)	21歳	10月13日、丹波教会松山会堂設立竣工式
	30年(1897)	23歳	1月、友金から辻原へ改姓／5月、五ヶ庄村五ヶ庄製糸合資会社(現南丹市日吉町)へ支配人兼技師として就職
	31年(1898)	24歳	2月、京都府立蚕糸業講習所(綾部)入学／9月、五十嵐幸喜の濃飛育児院(後の日本育児院)から幻燈会来丹／12月、京都府立蚕糸業講習所を卒業
	32年(1899)	25歳	2月、船井郡蚕糸同業組合(明田重次郎組合長)に技手兼書記として就職、同時に同組合製糸教習所教師の委嘱を受ける／10月、兄嫁辻原こと子、洛陽教会転出
	33年(1900)	26歳	3月、兄佐太郎永眠(32歳)／11月、大阪簿記学校で簿記法修得
	34年(1901)	27歳	3月、船井郡蚕糸同業組合退職、以後「自宅にて山野開墾桑樹栽培に従事」(現代船井郡人物史)一時期、三ノ宮村役場書記として勤務／8月6日、妻の葬儀(最初の妻?詳細不明)
	36年(1903)	29歳	3月16日、長女富誕生 (妻とめ(明治19年~?)との再婚時期等不詳)
	38年(1905)	31歳	2月14日、次女春誕生
	39年(1906)	32歳	3月25日、父辻原清之丞、須知会堂にて受洗(60歳)
	40年(1907)	33歳	3月17日、長男次郎誕生／6月27日、船井郡三ノ宮村水呑西田に「日本育児院京都分院」設立(児童8人収容)
	41年(1908)	34歳	1月、「丹波育児院」として日本育児院から独立／9~10月、内務省主催全国感化救済事業講習会(東京)参加
	44年(1911)	37歳	5月14日、四女梅誕生
大正	2年(1913)	39歳	7月22日、次男三郎誕生
	3年(1914)	40歳	12月、「負債の大整理」を行う 児童5人を機業技術習得のため京都と園部へ派遣
	5年(1916)	42歳	5月27日、三男四郎誕生
	6年(1917)	43歳	この時点で収容児童数16人(男9・女7)、発足以来延べ46人、この年の支出決算額976円
	7年(1918)	44歳	2月、織物・機業工場を新築
	8年(1919)	45歳	3月、派遣児童の帰院を受け機業工場稼働開始／6月6日、五女花誕生
	9年(1920)	46歳	9月、父清之丞死去(74歳) この年の児童数20人(男12人・女8人)、支出決算額1,496円
	15年(1926)	52歳	育児院閉院、愛知県下へ転出と伝えられる／『基督教年鑑』(12月12日発行)に「京都愛護院」(京都市上京区田中下柳五・辻原光治)掲載(詳細不明)
昭和	?	?歳	没地・没年不詳
	53年(1978)		3月17日、辻原次郎(長男)・三郎(次男)が水呑西田に墓標「辻原家之墓」建立